

# 国木田独歩と

## 佐伯の四人の青年(一)

山内武麒

国木田独歩は明治二十七年の七月限りで、鶴谷学館の教師の職を辞めて佐伯を去り帰国したが、その辞める前に教え子の佐伯の四人の青年と相談し、共に上京して共同生活を営みながら勉学しようとして固く約束していた。そして九月の初めに相前後して上京し、家を借りて独歩兄弟と佐伯の四人の青年は貧苦しながら共同生活を初めたが、独歩の事情で僅か二ヶ月余りで解散を余儀なくされてしまった。この経緯について記してみよう。

『欺かざるの記』の明治二十七年四月二十八日の記に

二十八日

昨夜、富永、尾間、高橋平吉の三氏を招き、語るに上京合宿、の事を以てす、三氏甚だ喜び、実行を約す。

蓋し、吾思へらく、此秋は吾も亦た上京すべし。而

して三氏の如きは実に其の境遇に於て不幸の青年なり、此を救ふは吾が欲する処なり。上京は其の唯一の法なり。三人は労働になれ居れり。故に東京に在りて各々力働せば口を糊するに窮せざる可し。此に於て吾之を一処に集めて合宿せしめ協力して勉勵せば彼等のために幸ならんと

而して実は彼等は吾之れを發議せざるも猶ほ自から上京せんと企て居たりし也。

とある。独歩は勧告書事件の後、学校内がごたごたし、六人の長期欠席者たちは国木田が罷めなければ出席しないというし、学校当事者も独歩を約束の一年の期限で辞めてもらふ腹であることを知り、七月限りで辞めて帰省し、秋には再び上京して職を探すことを決心していた。

その時これらの教え子たちも一しよに上京して、一軒の家を借りて自炊生活をしながら苦学してはどうかと相談したのである。この者たちは大喜びで賛成したのであった。

この日の尾間日記にも富永日記にもこのことを感激して記してある。その概略を記すと、尾間日記には、

先生は話された。自分は君たちの事は一日も忘れず何とかしてやらねばと考えていた。しかし今までこれという案もなかったが、ふと考えた。身を立て事をしようと考えたら、こんな僻地に居てはだめだ。それは東京に出ることである。

と。また富永日記には、

時はもう夜の十時、国木田兄弟と一しよに教会を終って先生の寓居に行った。今夜は尾間と並河も一しよであった。この晩のことは自分の生涯の中で最も記憶すべきものであった。先生は語られた「われわれは世間一般の人の中では、やゝ優れた識見と高い理想を持っている。われらが尽さなければならぬ責任は、前

途に山や川の如く横たわっている。われらは人であり、国民であり、また一個人である。と考えると何かしら悲しくなる。何故か。それは青年は再び来ないということである。年月はどんどん移り変わり、夢、幻の如く過ぎ去っていく。これが人間として一番悲しいことではないか。殊に君等は優れた才能を持ちながら、それを磨きもせず發揮することも出来ずに、空しく年とともに朽ち果てるのではないかと、それを思うと自分は腸を断たれるようである。日本の状勢、世界の大勢を考えると、君等をこんな辺鄙な田舎で空しく朽ちさせてなるものかと思う。自分はここで一つの策がある。今年の秋には自分は多分上京することになるであろう。それで君等に自分と行動を共にして欲しいのだ。どうだ君たち一つ奮発してみないか。東京は広くて学生も多い。もとより困難なことが多い。しかし君等の前途のことを思えば、これ位の苦労は何程でもない。生活は何とか出来てひもじい目に会うようなことはあるまい。私ども五人（収二を加えて）が家を一戸借りて、自炊し寝食を共にして、どんな職でもよいから職に就き僅かな給金でも節約していけば、何とか暮していく

ことが出来る。そして勉学に励めば、道が開けて東京に居る青年たちの中で頭角を表わすことが出来るであらう」と。

この話を聞いた三人の青年は独歩の心情に心から感激したに違いない。富永はすぐ賛成の意を表し、実は自分はわが家の家計上からも自分の一身上からも、近いうちに上京する腹つもりであったと話した。また、高橋、尾間の二人も賛成し、この二人はもう前に近い将来に上京することを誓い合った仲であった。これで話がまとまり、往きの旅費と、二ヶ月分の食糧を用意することを話し合った。また山口、飯沼にも話せばきつと行き度いと云うであろうが、二人も家の事情で実現がむずかしいだろうと話し合っている。

独歩は教え子たちのことをわがことのように心配し、何とかして彼らに前途に光明を与えようと考えたことがよく解る。

五月十二日の記に

昨夜、尋常小学校に会合す。

会するものは富永徳磨、尾間明、高橋平吉、及び収二と余と飯沼氏（源治）との六人なり。飯沼氏の宿直を幸ひとして密会したる也。談合する処は上京一件なり。

夜、暗澹としてもものすごく時に雨沛然として至る。会する場所はすなはち旧城主の殿、会するものは、為すあらんとて日本を舞台として前途を夢想し、今日に扼腕する少年青年血気の人々。とある。

この席で飯沼にも上京をすゝめると、飯沼は自分もこの計画には賛成であるが、自分には二つの難点がある。一つは脚気にかかり易いこと、一つには家をすて、出ることには忍びない。と断つた。

それからその翌日（十三日、日曜日）に尾間が独歩の許を訪ねると、山口行一にも上京のことを話してすゝめてみようと言われたので、尾間は山口を誘い、独歩兄弟と富永も加えて五人で船頭河岸から小舟を借りて舟遊びに出た。川を下って灘の方へ向い、舟の中で山口に上京の件を話した。山口は大いに勇んで、自分はそのうち上

京しようと考えていたのでは非加えて欲しいと申し出た。これで山口も加わり独歩兄弟と合せて六人となったのである。

六月二十四日の記に

二十四日 日曜日

昼飯には牛を煮て、富永、尾間、並河の三氏を馳走す。午後相伴ふて海水浴を試む。

とあり、その日の尾間日記には

八時に教会に行き十時半散会して、帰途国木田先生の許に行つて昼飯をよばれる。集つた者は富永、並河で愉快に会食した。昼飯をご馳走したのは牛肉があつたからである。みんな心のうちとけた殊に上京を誓い合つた連中ばかりであつた。一時半から葛港へ水泳に行った。泳いだり、にいなを取ったり、山莓を取って食べたり、また舟に乗ったりして遊んだ、それから妙見様へ行つて、並河君と相撲をとり、つゞいて先生ととつた。

と、ある。高橋と並河とは同一人物である。高橋家から並河家へ養子に行つていたので、両方の姓で呼ばれてた。

東京行き決心はいよいよ固まつてきたようである。

七月十七日の記に

「昨夜同志の諸子と舟を明月に浮べて、相談す。則ち上京に就ての策なり」

とあり、この日の富永日記を見ると、

「七月も已に半ばを過ぎ、国木田先生の帰郷の日も近づいたので、上京のことを相談しよう、同志である並河、尾間、山口と四人で、夜、国木田先生を葛の宿に訪ねた。

この晩は旧暦の十四日で、月が円く澄み渡つた空にかゝり、潮は満ちて波なく、葛餅を用意して舟を漕ぎ出した。港の中に出て四方の風光を眺めながら語り合った。曰く、上京するには、上京したならば……」とある。

七月三十日の記に

「昨日（日曜日）少年生徒九名を招きて昼食を馳走し、半日を海水に遊び、少年等と共に面白く送りぬ」とある。

いよいよ別れの日が近づいたので、生徒達を招いてご馳走してやったのである。

その晩は教会に出席して感話している。その話は、「私が佐伯に来て殆んど十ヶ月、その間私は人から誤解された。また人に対して過激であったので人と衝突もした。人が私を誤解しても、私は何とも考えていない。私の過激によって佐伯の青年たちを二分したので、大いに佐伯を害したけれど、私の過激は自分のまごころから出た過激であって、私は少しも良心に恥じるところはない。云々」であった。

そして、三十一日に薬師寺育造氏の發議で富永、尾間、並河、飯沼、山口、田中が葛港の独歩の宿に集まり、夜、国木田兄弟の送別会をした。坂の浦まで鶏を買いに行ったり、鯛も買い入れて調理してもらい、愉快に送別の宴を開いた。すむと今度は浜に出て海水浴を楽しんだ。

独歩兄弟は翌八月一日に生徒達に見送られて佐伯を出発し帰途についた。三津ヶ浜に一泊して松山を見物し、三日の朝三津ヶ浜を出て、夜の九時頃山口県柳井町の自宅に帰った。

柳井に帰った独歩は、近傍の知るべの家を訪ねて廻ったり、読書したり、思索に耽ったりして、上京の日を待った。その間、佐伯の四人の青年たちとは手紙で連絡をとり合っていた。

八月三十一日の尾間日記を見ると、

並河君が来て国木田先生から手紙が来たので、相談したいから来て呉れというので、一しょに出て山口君を訪ねたが留守、富永君を訪ねようと万年橋の方へ行くと、橋の上で山口君とばったり出会った。それから三人で富永君を訪ねたが、赤木村に行っていて留守であった。富永は上京の費用を借りようと、親族の家に行っていたのである。仕方なく三人で並河方に行つて先生からの手紙を見ると、これは上京に関する協議で、自分たちが日を延ばすことのないよう日時を決めて報

らせよということであった。また広島での宿などについても報らせてあった。それで三人で協議して四人の名前で、九月二日に出発すること、尚当地出発の際は電報を打ち、広島からも一電する旨の返事を書いて出した。

そして九月二日に富永と山口とが先に出発した。この日の尾間日記を見ると、山口は早くから葛港に出て汽船を待っていたが、同行する富永が来ない、沖に汽船の姿が見え出したのにまだ来ない。どうしたのだろうと心配して待ち草臥れてしまった。そしたら漸く車に乗って駆けつけてきた。そして波止場に立って二人の影が見えなくなるまで、ハンケチや帽子を振って見送った。とある。

また富永日記を見ると、「午前十時に葛に出て、十二時明光丸に乗って出港、遠ざかって行く古里の山、そこには母あり妹弟が居る。父の墓のあるところ、朋友のいるところ、また何時この土を踏んでこれらの人々と面会出来ようか。定めない浮世に、定めない社会に、当てもなく歩み出そうとするこの身には、ただ悲しい感慨のみであろうか。云々」とある。

この富永、山口の二人は翌三日の朝九時に三津ヶ浜に着き、こゝに降りて十一時出港の相生丸という小蒸気船に乗って広島へ向った。音戸の瀬戸、呉を経て午後五時に宇品に着き吉川という宿屋に宿をとり、国木田と尾間、並河に電報を打って、その晩は此処に泊った。夜の十時頃尾間から明日（四日）に立つから待っていて呉れとの電報を受取った。

九月四日の午前四時、呼び起されてみると収二君が迎えに来ていた。すぐ二人は国木田兄弟の宿に行き、万事を打合せた。

『欺かざるの記』の九月四日の記に、

「汽船中にて此の筆を執る。

昨夜岸の下港に乗船して今朝宇品港に着し宇品に於て富永、山口の両氏と会し、再び乗船して大阪に向つて発す。

今は午前十時其渡航中なり。

同行約束者の中、尾間、並河の両氏は故ありて吾等におくれたり」とある。

宇品で合流した独歩兄弟と富永、山口の四人は、尾間たちには待っているからこゝに来いと宿に云い残して、朝七時発の緑川丸に乗って大阪へ向った。尾間たちを待てば三日以上滞在せねばならず、大阪や東京で会うとしても困るに違いないから、東京の今井氏の処へ来るようにとの旨を書き残したのであった。

尾間と並河は、九月四日に両親や友人に見送られて佐伯を出発した。

先行の四人は五日の朝三時に大阪川口に着き、夜の明けのを待って宿につき、朝食をすませると、四人は打ち揃って中の島から天神橋に出て大阪城を見物して廻り、一旦宿に帰り駅に出て午後一時の上り列車に乗った。独歩の発議で途中彦根の独歩の親友大久保余所五郎氏を訪ねる為めに下車し、大久保宅に行き、彦根城に案内されて琵琶湖の風景を眺望したり、源五郎鮎のご馳走を戴き、一寸仮眠して翌六日の午前一時車で駅に出て東京に向った。新橋に着いたのは午後七時、すぐ宿につき銀座を一寸散歩した。七日に独歩は当分の下宿として麴町区三丁目の藤井方を決めた。山口はその晩自分の兄を訪ねた。八日から貸家を探して歩いた。富永はその日植村正久牧

師を訪問した。

一方尾間たちは八日漸く東京にたどり着いたが、今井氏の住む麴町区三番町に行くにはどう行ったらよいのやら解らないで困っているところに、佐伯出身の三輪類平、西田禎一の二人が来て教えて呉れた。人力車に乗ってようやく今井氏の宅を尋ねあてた。氏はすぐ独歩たちの下宿屋へ案内して呉れ、四人と会うことが出来た。そして七人で昼食を共にした。終ると外出し見物少々借家を探して歩いた。麴町区と牛込区とを廻ってわずか二軒を探し出した。

(つづく)

### 表紙解説 大師庵宝塔 軸丸 勇(写並びに文)

宇目町塩見園の大師庵に同型のものが二基ならんでたっている。向って左側に貞和五年己十月二十八日の銘がある。即ち一三四九年(六三一年前)北朝の年号である。相輪の一部が欠落しているの、確実な塔高はわからないが、約二・五mある。立派な細工で品格があり、佐伯南郡地域には類を見ない、すばらしい宝塔である。足利尊氏の利生塔造塔令により造立されたものかも知れない。県指定重要文化財である。